

ESRI統計より：景気統計

第15回景気動向指数 研究会について

経済社会総合研究所景気統計部

小沢 潤子

平成26(2014)年5月30日に第15回景気動向指数研究会が開催され、第15循環の景気の谷が平成24(2012)年11月に暫定設定された。これに伴い、景気の第15循環は平成21(2009)年3月の谷から平成24(2012)年4月の暫定山までの拡張期間37か月と、その後、同年11月の暫定谷までの後退期間7か月の計44か月となる。また、本研究会では景気動向指数の採用系列の改善に向けた中間報告も行った。

本稿では、①第15循環の景気の谷の暫定設定、②景気動向指数の採用系列の改善について説明したい。

1. 第15循環の景気の谷の暫定設定

第15循環の景気の暫定山前後のCIの一致指数をみると、平成24(2012)年3月に第15循環の拡張局面におけるピークをつけ、その後、暫定谷となる同年11月まで8か月間低下を続けた。平成24(2012)年12月以降は、平成26(2014)年1月まで上昇を続け、同年2月は前月の急拡大の反動減等もあって低下したが、3月は上昇している¹。

景気の谷が付き、拡張局面にあるとみなすには、①波及度(Diffusion：経済活動の拡大が経済の多くの部門に波及しているか)、②量的な変化(Depth：拡大の程度が顕著か)、③拡張・後退期間(Duration：ある程度の期間持続しているか)の確認が必要である。①波及度をヒストリカルDIで見ると、平成24(2012)年11月に26.4%となった後、翌12月以降50%を上回っている(過半の系列が上昇となっている)。②量的な変化については、暫定谷以降のCI一致指数上昇率は12.7%であり、第11～13循環の谷以降の上昇率を上回っている。③拡張・後退期間であるが、第15循環の後退期間7か月となり、「景気の谷は直前の景気の山から5か月以上経過」との目安を上回った。また、暫定谷以

降をみると、平成26(2014)年3月までの16か月間、前述の通り、ヒストリカルDIは50%を上回っており、拡張局面とみなすに十分な期間が経過している。

こうした検証結果に基づく研究会での議論を踏まえ、平成24(2012)年11月を暫定の谷と設定した。

2. 景気動向指数の採用系列の改善

景気動向指数の採用系列は、経済構造が時とともに変化していくことを踏まえ、ほぼ景気が一循環を経過するごとに景気循環との対応度等を点検し、入替を行っており、現在は、第11次改定に向けた検討を進めている。今回の代替系列選定の際には、従来の6つの基準²に照らしつつも、近年の景気動向への対応度に重点を置き、平成12(2000)年以降の景気の山・谷(第13～15循環)との関係を重視した。

2.1. 先行指数

①現行の先行指数の課題

先行指数においては、直近の第15循環の暫定山に対する明確な先行性が見られない、景気の谷に対する先行期間が短い、先行のタイミングの不安定さが挙げられる。

②系列を入れ替えた場合のパフォーマンス

今回は、「L3新規求人数」「L4実質機械受注」「L8長短金利差」の代替指標と、併せてサーベイ調査指標の将来的な拡充を考慮し、「景気ウォッチャー調査」等の追加指標を検討した。「L3新規求人数」は除学卒からパートに、「L4実質機械受注」は製造業と非製造業から製造業のみにカバレッジを変更し、「L8長短金利差」は「マネーストック(M2、前年同月比)」に入れ替えを行い、「景気ウォッチャー調査・先行判断D.I.」を追加した場合、CIの直近の山に対するリード・ラグが早まることが確認された。ただし、「景気ウォッチャー調査」は平成12(2000)年調査開始であり、統計的充足性の基準を満たしていないため、引き続き、先行系列の入れ替え案について検討が必要である。

1 本稿の数値データは第15回景気動向指数研究会当時のものである。

2 6つの基準とは、経済的重要性、統計的充足性、景気循環との対応、景気の高谷との関係、データの平滑度、統計の速報性である。

2.2. 一致指数

①現行の一致指数の課題

一致指数の採用系列は、景気の山・谷の設定に影響することから、慎重に検討する必要があると同時に、景気の定義ともかかわることから、単にパフォーマンスの良さのみを条件とするのみならず、各経済部門の指標をバランス良く採用する視点が必要である。個別の採用系列をみると、「C3大口電力使用量」は、東日本大震災以降、節電実施、自家発電の増加等から、生産動向との相関の弱さや、不規則変動が見られ、また、今後もエネルギー政策の転換が予想されるため、採用の見直しが必要と考えられる。「C11有効求人倍率」は第15循環に対応する転換点がついておらず、労働市場の構造変化の影響があると考えられる。

②系列を入れ替えた場合のパフォーマンス

今回は「C3大口電力使用量」の代替指標として「稼働率指数」「企業向けサービス価格指数（前年同月比）」「実質輸出（季調値）」を検討した。いずれに入れ替えた場合もCI一致指数は現行とほぼ同様なパフォーマンスを示したが、「稼働率指数」については統計の速報性、「企業向けサービス価格指数（前年同月比）」については、コストを示す指標を一致系列に含めてよいのかという景気の定義にかかわる問題点が指摘された。「実質輸出（季調値）」は「C3大口電力使用量」と概念的に異なる指標である点、指摘されたが、現行の採用系列は生産関連に偏っており現行の概念に近い指標で代替することへの懸念、グローバル化による外需関連の系列の必要性等の肯定的な意見も示されている。なお、「C11有効求人倍率」は非正規雇用の拡大等の労働市場の構造変化の影響により、従来のカバレッジ（除く学卒、含むパート）では景気の動きを十分に把握できないことが懸念されるため、カバレッジを変えての検討を行ったが、依然として第15循環においては対応する転換点がついていない。

2.3. 遅行指数

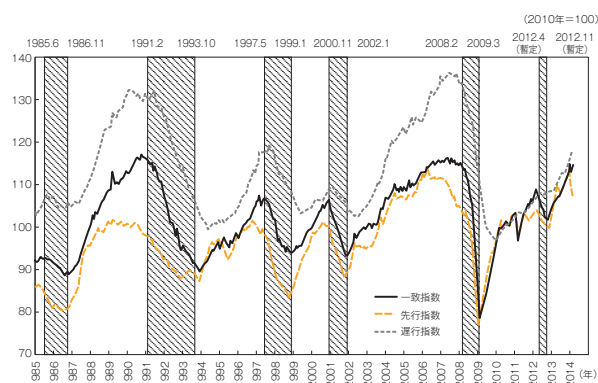
①現行の遅行指数の課題

遅行指数では現在6系列を採用しているが、系列数の少なさに伴う不安定さ等が指摘されており、第15循環においては暫定山に対応する転換点がついていない。

②系列を入れ替えた場合のパフォーマンス

今回は、系列数の拡充を目指し、追加採用指標を検討した。景気に遅行して動く指標として、賃金関連の「きまって支給する給与」、在庫関連の「最終需要財在庫指数」、物価関連の「消費者物価指数（食料（酒類を除く）及びエネルギーを除く給与）」を追加候補とし、また、「Lg4家計消費支出（全国勤労者世帯、名目、前年同月比）」についてカバレッジの広い（勤労者世帯以外を含めた）二人以上の世帯ベースでの代替を検討した。これらの指標を採用した結果、山に対するCIのり

景気動向指数（CI）の動き



（備考）シャドー部分は景気後退期を示す。

ード・ラグ月数がより明確に遅行性を示すようになり、CIにおいても直近の山に対応する転換点がつく等、安定性や今循環の暫定山に対応する動きに改善がみられた。

3. おわりに

今回の景気動向指数の採用系列の改善案は中間報告である。今後は、景気動向指数の採用系列の改定（第11次改定）を行い、第15循環の景気の山・谷を確定することとなる。第15回研究会において委員から「景気動向指数に採用するにあたって、パフォーマンスだけでなく、景気との関係、意義を明確にすべし」等の意見もあり、個々の採用系列を見直すだけでなく、景気動向指数の根本的な考え方に立ち返る必要性も感じられた。こうした課題も踏まえ、第11次改定に向けて、景気動向指数の採用系列の改善に努めてまいりたい。

小沢 潤子（おざわ じゅんこ）